

ふるさと再発見！

vol. 32

ほろほろ わかやま



巻頭
特集

紀州の山を駆ける紀州犬

—誇り高き「みちびきのご神犬」—

散策

ものづくりat和歌山

わかやま魅力発信人

I♥WAKAYAMA 私の和歌山

農と交通の大動脈 一小田井用水と大和街道—
キラキラ添える紀州手毬の宝石 一毬玉—
正田 明日香さん ショップ&カフェ「くくたち」経営
かつらぎ町長 中阪 雅則さん

【特集】

紀伊の山を駆ける

紀州犬

「誇り高き」「みちびきのご神犬」

和歌山県のシンボルとして、県内外の人々から親しまれている「紀州犬」。凜とした立ち姿と深い忠誠心を併せ持つこの犬は、古くから紀伊半島の自然の中で人々とともに生きてきた。その気高い魅力は今も多くの人々の心を惹きつけている。

紀伊の山に生きる犬

国の天然記念物に指定されている日本犬は6種——柴犬、秋田犬、北海道犬、四国犬、甲斐犬、そして紀州犬だ。

紀州犬のルーツは、古くから紀伊半島にいた土着犬で、長年にわたる自然な交配によって環境に適した独自の進化を遂げてきた地域固有の犬種だ。現在の和歌山県から三重県にかけての地域が発祥とされる。険しい地形の中で、猟師1人につき猟犬1匹が伴う伝統的な「一銃一狗」のス

タイルでイノシシなどを狩るために飼育されてきた。猟犬としての働きだけでなく、農作物を荒らすイノシシやシカから家や畑を守る頼もしい番犬として、地域の暮らしにも深く結びついてきた。

紀伊半島の土着犬は、かつて地域ごとに那智犬・日高犬・熊野犬・太地犬・根来犬・奥吉野犬などと呼ばれていたが、昭和9年（1934）に紀伊半島一帯に暮らす犬種の総称として「紀州犬」と名称が統一され、国の天然記念物に指定された。これにより和歌山県を代表する犬として知

られるようになった。

毛色は白色が主流だが、赤毛や胡麻毛などの有色犬もいる。現在の「紀州犬Ⅱ白」というイメージが定着した背景には、山中で目立つことにより獲物と見間違えにくく誤射しないなどの理由から白毛が重用されたといわれている。

その気品と佇まい

紀州犬の大きな魅力のひとつは、その端正な容姿にある。体の大きさは中型で、雄は体高52cm前後、雌は49cm前後。引き締まった体つきにバラン



紀州犬の銅像
(JR 和歌山駅わかしお広場)

スよくついた筋肉。まっすぐピンと立った耳と、柔和な「ハマグリ型」のつぶらな目が特徴的だ。尻尾は、「巻き尾」と「差し尾」の2種類がある。日本犬といえば巻き尾が一般的だが、紀州犬には内側にしなりながら立ち上がる差し尾も多く見られる。

また、後足の足の裏よりも少し上の位置に5本目の爪である「狼爪」を持つものが8割程度みられることは、他の日本犬には少ない特徴の一つだ。

毛色は、白が9割以上に対して、有色はごくわずか。かつては、さまざまな毛色が見られ、「紀州犬七毛色」(白・黒・赤・胡麻・赤胡麻・黒胡麻・灰胡麻)と呼ばれるほど多彩だった。

立ち姿は堂々としており、日本犬らしい力強さと上品さを兼ね備えている。

凛々しさと優しさ

紀州犬は非常に賢く、しつげがしやすい犬種だ。性格は温厚で忠誠心が強く、飼い主や家族には深い情を寄せ、穏やかな表情を見せる。一方で、俊敏さや警戒心を持ち合わせ、家族を守ろうとする気質から、他の人には懐きにくい面もある。

散歩や運動をしつかり行うことが欠かせず、向き合う時間を確保して、深い信頼関係を築くことができれば、家庭でも良きパートナーとなる。この強さと優しさを併せ持つ気質こそ、多くの人を魅了し続けてきた理由といえるだろう。

紀州犬にまつわる伝説

史実とは異なるかも知れないが、紀州犬にまつわる伝承がある。伊勢や熊野、奈良や

高野山といった神仏信仰が盛んな土地柄から、信仰と関わる伝説も多い。

例えば、高野山開創にまつわる「みちびきのご神犬」伝説。留学先の唐から帰国した弘法大師・空海は、真言密教の根本道場を開く場所を探していた。山中で出会った狩人(狩場明神の化身)が連れた



▶白と有色(胡麻毛)

白黒2匹の犬に導かれて高野山に辿り着いたとされている。この物語は、「今昔物語」や「金剛峯寺建立修行縁起」

などにも記され、多く知られている。絵巻物などに描かれた犬たちは、引き締まった体つきや立ち耳などの紀州犬の特徴をとらえているように見える。

また、熊野地方に伝えられている「弥九郎とマン」の伝説。江戸時代の猟師・峰弥九郎が、山でオオカミを助けた。半年後、弥九郎の家の前にオオカミの子と思われる子犬がおり、弥九郎はマンと名付けて猟犬として育てた。新宮城主が狩りをおこなった際に、手負いのイノシシが反撃してきた。それをマンが退治して、とても喜んだ殿様から褒美を与えられた。その名声は大いに上がったという。紀州犬は、そのマンの血を引いているといわれている。

愛される、地元の犬

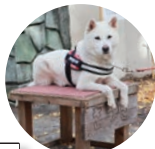
地元・和歌山では、今もなお紀州犬は特別な存在だ。県

のPRキャラクター「きいちゃん」や、和歌山県警のシンボルマスコット「きしゅう君」のモチーフにもなっている。誰でも会いたくなったら気軽に会いに行ける場所がある。和歌山城公園動物園と、世界遺産・丹生都比売神社だ。和歌山城公園動物園では白毛の2匹が飼育され、ふれあい体験などを通して訪れた子どもたちや観光客に親しまれ

紀州犬ふれあい体験

平日 ①11:00~11:15 土・日・祝日 ①11:00~11:30 ②14:30~15:00

あやめとさつき。5月の同じ日に生まれた7歳です。おとなしく人懐っこいので、ぜひ会いに来てください。



和歌山城公園動物園

「白黒の犬」と高野詣

白黒2匹のご神犬と丹生都比神社、弘法大師の縁は、近世、近代を通して深い。『紀伊國名所図会』（江戸時代後期）では、高野山への参詣の場面で白黒2匹の犬が描かれている。また、丹生都比売神社の項では、応神天皇の時代に黒白の犬と犬飼2人を賜ったことをはじめとし、弘法大師の伝説を含めた犬に関するエピソードを紹介している。大正時代には、歌人の吉井勇が「夕されば狩場明神あらわれむ山深うして犬の声する」と詠んでおり、「みちびきの犬」の伝説が多くの人々の間で共通認識となっていたことがうかがわれる。



▲現在の高野詣



▲『紀伊國名所図会』の「不動坂口女人堂」の図。
○の中に白黒2匹の犬が描かれている。

戦後、日本各地でペットブームが起こり、特に白い犬が人気を博した。紀州犬も例外ではなく、ピーク時には飼

頭数減少という現実

▶丹生都比売神社と白黒犬



ている。また、弘法大師・空海を高野山へ導いた2匹の犬の伝説が残る世界遺産・丹生都比売神社では「ご神犬」として白と胡麻の2匹が活躍し、月次祭が行われる毎月16日には参拝者の前でその姿が公開され、大きな人気を集めている。

育頭数が1万頭を超えたとき、現在は危機的な状況だ。日本犬保存会によると、平成10年（1998）に1450頭だった年間血統書登録数は、令和6年（2024）には119頭と大幅に減少している。

その背景には、マンションなど集合住宅の増加といった住環境の変化、近年の猫ブーム、小型犬や洋犬人気の高まり、愛好家世代の高齢化、猟師人口の減少など、複数の要因が影響している。中型犬は運動量が多いため、体力と時間が必要となる点も飼育のハードルとなっている理由のひとつだ。それでも、長年と

もに暮らしてきた飼い主たちは「向き合った分だけ応えてくれる、忠実でかわいい犬だ」と口を揃える。

未来へつなぐために

紀州犬は、和歌山の自然と



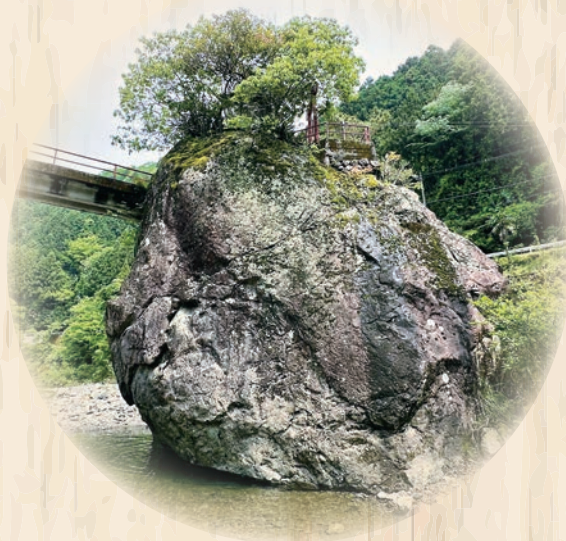
▲丹生都比売神社のキャラクターご神犬しろまるくろまる

ともに育まれ、地域の文化や人々の暮らしの一部として受け継がれてきた日本犬だ。地域に根づいたこの犬を守り、次世代へと伝えていくには課題も多い。保存会や愛好家たちは、健康な繁殖や飼育環境の維持、普及啓発活動に取り組み、紀州犬を未来へつなぐ努力を続けている。動物園での展示や展覧会の開催など、多くの人に触れてもらう機会づくりもその一環だ。

多くの人々に愛されるその気高い姿と優しいまなざしを、これからも私たちはあたたかく見守り、次の世代へとつないでいきたい。

各地に伝わる

「みちびきのご神犬」伝説



立岩大明神(紀美野町)

貴志川にそびえ立つ大岩。狩場明神とご神犬が、村々を襲う化けイノシシをここで退治したという。

皮張石(かつらぎ町)

狩場明神が狩りをした場所として伝わり、お供をしたご神犬の足跡が岩の上に残っている。

青賀原神社

(大阪府河内長野市下里町)

女人高野・天野山金剛寺近くの神社。弘法大師がこの地を通った際に九つの頭を持つ大蛇に襲われ、狩場明神とご神犬が退治したと伝えられている。

高野山(高野町)

織田信長が高野山を攻めた際、その陣中にご神犬が現れ、軍勢を混乱させたという。その結果、高野山は攻め落とされることがなかった。

現在の「みちびきのご神犬」

丹生都比売神社

丹生都比売神社では、人々を幸福や良縁に導く現在の「みちびきのご神犬」として、すずひめ号と大輝号の親子が活躍している。弘法大師を導いた伝説にたがわない白黒の2匹で、毎月の公開日はもちろん、神事や催事の際にもそのりりしい姿で人気を集めている。

2匹は母子で、すずひめ号が母、大輝号が子。平成29年(2017)年に母のすずひめが奉納され、2019年に大輝号が誕生した。

ご神犬の人気もあって、近年では動物を愛好する多くの参詣客が訪れるようになった。現在の「みちびきのご神犬」は、紀州犬のシンボルとして、今日も多くの人を聖地に導いている。



小田井用水

紀の川の北岸を流れる用水で、橋本市、かつらぎ町、紀の川市、岩出市を通り、その長さは約30kmにおよぶ。1707年、5代目藩主の徳川吉宗の命により、大畑才蔵が指揮をとって開削。現在も周辺の農地を潤す重要な役割を担っている。川の上を渡すアーチ橋の「龍の渡井」が有名。登録有形文化財。



①十五社(じごせ)の楠

1958年、県の天然記念物に指定。樹木医の診断によると、樹齢は600年を越えており、近畿地方最大級の大きさを誇る。



②一字一石

千家流の茶人・川上不明白が、1797年に先祖の供養のために建立した塚。「一字一石」は仏教で経文を小石に一字ずつ書き写し、供養のために地中に埋めたもののこと。県文化財。



JR 笠田駅は街道沿いの駅にふさわしいレトロなたたずまい。駅前から少し南へ歩けば、大和街道との交差点にたどり着く。

駅に近い大和街道は霧囲気のある商店街で、どこことなく昭和の雰囲気漂わせる。そのまま街道を進めば閑静な住宅街へ。時折目に入る格子や石垣に、「街道を歩いている」という気分が盛り上がってくる。

やがて眼に入るのは、**十五社の楠**。写真に撮ろうと思っても、全体がフレームにおさまらないスケールだ。少し歩いて**一字一石塔**まで来ても、振り返れば住宅の上から巨大な楠が覆いかぶさり、存在感を放っている。

農と交通の大動脈

小田井用水と大和街道

かつらぎ町笠田駅周辺



④文覚井(もんがくゆ)

全長約5km。京都神護寺の文覚上人が開発した
農耕用水路と言われている。



⑤神願寺(じんがんじ)

宝来山神社に隣接し、元は同社の神宮寺。鎌倉時代の絵図に描かれた「堂」はこの寺にあたると言われている。



⑥小庭谷川渡井(こにわだにがわとい)

小田井用水の開削時、堂田川の上を横断するために設置された水路橋。



③宝来山神社

創建773年。紀ノ川をのぞむ高台に建つ。本殿四社は重要文化財。鎌倉時代にこの付近の景観を描いたとされる2枚の絵図は重要文化財で、教科書にも取り上げられている。



大和街道

紀の川に沿った街道で、古くから和歌山と大和を結ぶ道として大勢の人々が行き交った。都が奈良におかれていた頃、都と各国を結ぶルートの一つとして誕生。多くの万葉歌人が歌を残し、船岡山、背山、妻の杜、真土などさまざまな場所に万葉歌碑が建てられている。

「宝来山神社」の道標に従い、街道を離れて右折。線路を渡れば、見えてくるのは神社の鳥居だ。ひとつめの鳥居をくぐり、長い参道を抜ければ、境内へ参詣を終えると、宝来山神社の神護寺である**神願寺**にもお参り。境内には、県指定史跡の**文覚井**も通っている。

線路の北側の見どころは、なんとといっても小田井用水、並行して歩いたり、渡ったり。目にするたびに驚かされるのは、豊かな水量だ。そのゆつたりとした流れに、ここまで歩いてきた体と心の疲れが癒される。

そろそろ笠田駅が近づいたと思うところまで歩いてくると、小田井用水がレンガの橋で川の上を通っている場所を目にする。これが**小谷川渡井**で、「昔の人はよくこんなものをつくったな」と目を見張る建造物だ。

小田井用水にかかる小橋を渡り、踏切を渡れば、笠田駅はすぐそこ。悠久の歴史と豊かな水の流れに触れて、すっかりリフレッシュすることができた。



キラキラ添える 紀州手毬の宝石

色とりどりの紀州手毬を、アクセサリとして身に付ける。和歌山市の石井景子さんが作り出す「毬玉」は、そんな夢を可能にした「手毬の宝石」だ。その唯一無二の技術で、伝統の美しさに新たな輝きを加える。

ものづくり
at 和歌山

毬玉

手毬づくりは渋い？

「毬玉」作家の石井さんにとって、紀州手毬は生まれたときから傍らにあるものだった。趣味で手毬を作る祖母の姿を見て育ったからだ。20代の頃、その祖母が他界すると、自分のなかでの祖母と紀州手毬の存在がいかに大きかったかを知ることになる。そして、自らも手毬づくりの教室に通い始めた。

その頃、同世代の友人に「紀州手毬づくりを習っている」と言うと、「渋い」と返されることが多かった。確かに、手毬に興味を持つ人の年齢層は高い。手毬をもっと身近に

感じてもらうにはどうしたらいいのか。そこで考えたのが、「アクセサリとして身に付けられる小さくてかわいい手毬をつくれなにか」ということだった。



プレミア和歌山に選出

ツヤツヤ、キラキラ

「身に付けられるもの」と言っても、ただ小さくすればいいというわけではない。目指したのは、ビー玉のようにツヤツヤな質感。毛糸でできた手毬をどういう素材でコーティングすればうまくいくのか、何年も試行錯誤を繰り返した。

長年の苦勞の甲斐あって、完成した「毬玉」は、色とりどりの毛糸の質感をしつかりと保持したまま、ガラスのような透明感のある仕上がりとなった。「毬玉」の「玉」には、「宝石」という意味もある。



キラキラかわいらしい「手毬の宝石」は、イヤリングやピンバッジ、ブローチにキールダーと、さまざまなかたちで身に付ける人に輝きを添えている。

プレミア和歌山

「注文がたくさん入ってレッスンシャーがかかっていても、糸を巻いたり針を刺している時間はいつも楽しい」と石井さん。特に自分のなかで非の打ちどころのない完成度で仕上がった時の喜びは格別だという。

その品質とオリジナリティーは高く評価され、令和4年(2022)には和歌山県優良県産品(プレミア和歌山)にも選ばれた。



その後はメディアでの紹介を通じて認知度を上げており、石井さんは「幅広い年齢層の方々、そして男性にも興味を持ってもらえれば」と意欲を燃やしている。



挑戦が裾野を広げる

手毬の魅力は、色とりどりの糸が織りなす模様の美しさ、そして、それを支える伝統的な技術の高さだ。しかし、「毬玉」は、それに加え、新しい挑戦に取り組んだからこそ、紀州手毬に興味を持つ人の裾野をさらに広げることができた。

「例えば、毬玉のブローチを作るためには、玉を半分に切る必要があります。でも、手毬を半分に切るなんて本来はあり得ないこと。だけれどもやったことがないことだからこそ、難しいチャレンジになります」。伝統に新たな光を加える石井さんの挑戦は、これからも続く。



「毬玉」

石井 景子

www.instagram.com/3yui_temari.ig
mail: 3yuiino.temari@gmail.com



紀州手毬



すべて手作り



個展を開催



ショップ&カフェ「くくたち」 経営

正田 明日香さん



農業と人をつなぐ架け橋に

今回は石川県、滋賀県での生活を経てUターン、和歌山市で県産の農産物や加工品のショップ&カフェ「くくたち」を運営する正田明日香さんに、和歌山の魅力を語っていただいた。

和歌山の「いいところ」

故郷を離れて暮らすと、

見えてくるものがある。正田さんが暮らした石川県や滋賀県では、多くの人が地域に誇りを持っており、地域の「いいところ」を積極的に発信していた。和歌山の人が「何もない」と言うのとは対照的だった。

でも、和歌山にも「いいところ」はたくさんある。それが伝わっていないのは、うまく発信されていないからではないか。それなら、自分がそれを伝える役目を果たしたい。正田さんが発信することに決めた「いいところ」は、農業だった。

大学・社会人を県外で

もともと農業には興味があり、大学に進学する際には農学部を選んだ。石川県

の大学だった。そこで環境問題について学び、サークル活動や授業の一環で農業にも触れた。

卒業後は電気部品メーカーに就職、滋賀県に勤務することに。業務に追われるなかで、正田さんの目に魅力的にうつったのが、会社の窓から見える田んぼだった。

その後、農業に役立つ仕事があったと、メーカーを退職。滋賀県の農業生産法人で2年働いた。初めての、本格的に農業にかかわる日々。そのなかで気づいたのは「生産」は得意でも「販売」に苦

手意識のある農家が多いということだった。その部分で、自分も農業を応援できるのではないかと考えるようになった。

10年振りの和歌山

「地元で農産物や加工品を販売するお店を開こう」という計画を持って、和歌山市にUターンしたのは2015年。石川県の大学に進学してから10年以上が経っていた。

いざ地元に戻ってみると、以前とは様変わりしていることも多く、また、学生時代から和歌山を離れたので、そもそも地元について知らないことがたくさんあった。

最初は直売所や道の駅を地道に訪問するところから





正田 明日香

和歌山市出身。石川県の大学に進学、社会人として滋賀県で勤務し、2015年にUターン。2017年に県産の農産物や加工品を提供するショップ&カフェ「くくたち」をオープン。農家とお客さんが直接触れ合う「おしゃべりマルシェ+野菜市」を毎月開催している。野菜ソムリエ。

豊かな自然と作物

スタート。魅力的だと思う商品を購入し、農家に直接手紙を送ってやりとりが始まった。そうして少しずつ、農家との信頼関係を強め、2017年、「くくたち」をオープンした。

和歌山の魅力のひとつは、

なんといってもその作物の豊かさ。山、川、水。大自然に恵まれ、多様な作物が生産される。

「くくたち」では、産地直

送の野菜はもちろん、ジャムや紅茶、梅干しなど、様々な加工品を販売。一定の地域ではなく、県内各地の農産物や加工品を販売している。正田さんは「本当にいろんなところで、いろいろなものを作っている農家さんがいる」と力を込める。

農家と農業のファンに

毎月開催する「おしゃべりマルシェ+野菜市」では、



おしゃべりマルシェ+野菜市

農家がお客さんに直接、生産した野菜への思いを伝え、食べる人の声を直

接聞くことが、生産者の励みにもなる。産地訪問バスツアーも開催し、養鶏場の餌やり体験や、ジビエ解体の見学が好評だった。

「農家さんは、やっぱり現場にいるときがいちばんカッコいい。直接触れ合ったり、現場の空気を五感で感じたりすることで、訪れた人がファンになってくれる。そのうえで、多くの人に農業自体にも興味を持ってもらえればうれしいですね」。和歌山の農業と人をつ



〒640-8282 和歌山市出口甲賀丁 38-2
TEL 073-460-8137
URL : <https://kukutachi.jimdofree.com/>



産地訪問バスツアー

なげる活動は、これからも続いていく。

I ♥ WAKAYAMA 私の和歌山

バラエティに富んだ和歌山の文化

かつらぎ町長 中阪 雅則

紀北東部に位置するかつらぎ町は、奈良や大阪に近い位置にあります。この地理が重要で、文化の形成に影響してきます。

町の西端にそびえる「背ノ山」は、7世紀、古代の中心地「畿内」の南限とされました。実際に、背ノ山を境に、異なる種類の古代瓦が出土します。背ノ山の東側に位置する佐野寺跡では、建物の土台に木製の外装材が検出される等、奈良や大阪にあった中央政権の影響がみられます。

また、天野盆地に鎮座する「丹生都比売神社」では、様々な信仰が共生してきました。京・高野山・修験者が介在した芸能や文化があり、信仰を軸とした交流がありました。

他にも、かつらぎ町には交流や影響を物語る資料が数多くあります。このように、紀北東部、特にかつらぎ町をみると、和歌山の文化は様々な交流や影響で生まれた多様性に特長があると思います。

11月12日、町内に歴史民俗資料館がオープンしました。木製基壇の古代寺院「佐野寺跡」から出土した佐波理鏡蓋など、貴重な文化財の実物が、数多く展示されています。ぜひ皆さんお越しください。



祈りと共生の世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産「丹生都比売神社」。様々な信仰・芸能・文化の拠点となった。



木製基壇の古代寺院「佐野寺跡」から出土した佐波理鏡蓋。佐波理は銅と錫の合金で、全国でも数例しか確認されておらず貴重。



編集後記

伝統は受け継いでいくだけでは守ることはできない。伝統的な技術や知識をしっかりと身に付けたいうえで、そこに新たな光を当てる。今号では、そういう挑戦を続ける人に多く登場していただきました。

例えば、紀州手毬をアクセサリとして輝かせるために半分に切ることは、常識では考えられないことだと言います。しかし、そこにあってチャレンジすることで、紀州手毬を多くの人に気軽に身に付けてもらえる可能性が広がりました。これまでよりも「伝統」に触れてもらえる機会が増えたということです。

『ほうぼわかやま』も、伝統的なものを紹介しながら、その「伝統」に新たな光を当てられるような、そんな誌面をつくっていきたいと思っています。新たな挑戦を取材できる日を楽しみにしています。

編集長 宇治田 健志

「ほうぼわかやま」発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で2008年から発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。
設置場所：和歌山市内のコミュニティーセンター、県内の図書館、TSUTAYA WAYなど詳しくはホームページをご覧ください。

ほうぼわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。

詳しくはウェブで検索→ <https://w-i-n-g.jp> **ウイング 和歌山** **検索**

協力機関 本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。
(順不同・敬称略)

丹生都比売神社、和歌山城公園動物園、毬玉、くたち shop+ café

アンケートで当たる!!

感想をお寄せいただくと...

抽選で**5名様**に

丹生都比売神社様の
『ご神犬の缶詰パン』を
プレゼント!



こちらから感想をお寄せください!→

※お葉書でもお受けいたします。
〒640-8411 和歌山市堀取17-2
株式会社ウイング ほうぼわかやま係 宛

〆切 2026年5月末日



株式会社
ウイング

さくらノート
和歌山

COURSE
コース

地域と企業のブランディングをお手伝いする広告・制作会社です。『ほうぼわかやま』の発行や本づくりを通じた地域文化の振興を目指しています。就職応援 BOOK「COURSE (コース)」や、キャリア教育本「さくらノート」も発行しています。[沿革] 創業 1972 年。設立 1981 年。